

常総古墳文化の系譜

平成16年10月26日(火)～12月24日(金)



EPISODE 2

日本国家の源流

取手市埋蔵文化財センター



舟塚山古墳航空写真（石岡市教育委員会提供）

常総古墳文化の系譜 —日本国家の源流— エピソードⅡ

4世紀から7世紀にかけて古墳時代と呼ばれます。それはこの時代に、ほかの時代には見られない大きな墓が盛んにつくられたからでした。こうした現象は日本だけではなく世界のいたるところでみられました。しかしこの名称は時代のひとつの現象だけから名づけられたものでその歴史を正しく現すものではありませんでした。3世紀の弥生時代に西日本では「倭国大乱」といわれる大きな戦いが行われていました。その緊張関係は九州から畿内まで日本全国の半分にも及びました。それらの戦いのなかから同盟関係や従属関係など新たな統一国家の兆しが芽生えてきました。一方、東国では弥生時代にはそのような緊張した状況ではありませんでしたが、いったん西日本が平定されるとその版図の拡張は東国に向けられるようになります。こうして東国と中央との緊張関係が高揚していったのでした。東国における古墳時代は必然的に武力による中央権力者との対峙にあったのでした。日本全土の国家的な統治が完成したのは「風土記編纂」にみられるように8世紀近くになってからでした。

平成16年10月

取手市埋蔵文化財センター

例言

1. このパンフレットは平成16年10月26日から12月24日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第14回企画展「常総古墳文化の系譜 日本国家の源流EPISODE 2」にともない発行されたものです。
2. 企画とパンフレットの執筆・編集は埋蔵文化財センターの宮内良隆が担当しました。
3. 開催にあたり、我孫子市教育委員会、石岡市教育委員会、霞ヶ浦町教育委員会、霞ヶ浦町郷土資料館、ひたちなか市教育委員会、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター、龍ヶ崎市教育委員会、竜ヶ崎市歴史民俗資料館、茨城県教育財団、多久那研究会から多大なご協力をいただきました。またつぎの方々からご指導、ご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。
浅井哲也、安藤敏孝、飯野雄一、稲田健一、岡村真文、櫻村宜行、片平雅俊、鴨志田篤二、小杉山大輔、斉藤新、白石真理、田崎徹、千葉隆司、生田目和利、西野保、箕輪健一、早川麗司、湯原長武（敬称は略させていただきました）

I 古墳時代のはじまり

古墳時代の始まりをしめす遺物や遺構はさまざまです。土器や鏡、巴形銅器など弥生時代からの伝統を受け継いだものや、前方後円墳や三角縁神獣鏡など新しい時代に初めて登場したものもあります。そこで古墳時代のはじまりの契機を弥生時代からの社会や政治の発展の延長からとする見方と、転換期におこなわれた国家的な変革とみる見方があります。ここでは、西日本での弥生文化の影響を強く示す特殊器台が久慈群の星神社古墳で発見されていることを紹介します。古墳時代を代表する遺物のひとつが埴輪です。その起源は弥生時代の祭祀に用いられた特殊器台と壺の組み合わせにあると考えられています。星神社古墳で採集された資料は線刻をもつ特殊器台と底部穿孔の壺形土器破片でした。



星神社古墳採集特殊器台・壺形埴輪



舟塚古墳群出土壺形埴輪



伝舟塚山古墳出土盾形埴輪

舟塚山古墳出土埴輪 縦に黒いしみのような斑点があり、窖窯（あながま）によらずに焼かれた古い形式の埴輪の特徴です。この点から舟塚山古墳の年代が5世紀中葉以前と判明しました。

舟塚山古墳出土朝顔形埴輪 この長い円筒埴輪は舟塚山古墳の周濠のなかから出土しました。朝顔形埴輪は器台に壺を載せた状態を模したといわれ、いったん球形にくびれ再び花卉状に開く口縁をもちます。この埴輪はもともと花卉を欠きここに口縁のない壺を合せ口の蓋とした埴輪棺でした。

* 舟塚山古墳 石岡市高浜町にあり、恋瀬川の河口付近の台地に築造された茨城県最大、関東第2位の全長182mの前方後円墳です。3段築成で、円筒埴輪が三重にめぐると推定されます。古墳群は前方後円墳3基・円墳19基・方墳1基・不明2基で構成されています。

* 星神社古墳 久慈郡金砂郷町にあり、久慈川の支流である山田川と浅川に挟まれ北西から南東に連なる阿武隈高地の先端に点在する小丘陵の間に位置しています。墳丘は著しく後円部が高く前方部が低い古式な様相を示しています。未調査ですが墳丘から発見された特殊器台と壺形埴輪から4世紀中葉の築造と推定され、久慈川流域および常総地方で最古の前方後円墳と考えられています。付近には最古の前方後円墳といわれる奈良箸墓古墳と同型の梵天山古墳があります。

壺形埴輪 特殊器台と組合せて出土するのは古い形態です。西日本で製作された有段で外に大きく外反する壺を模倣しています。4世紀から5世紀前半頃まで比較的長い期間に古墳から出土します。墳頂部を中心に埴輪のように並べられる場合もあります。舟塚山古墳群から出土した壺形埴輪は胴が球形で口縁の有段部に貼付けの粘土帯をもっています。出土地点の詳しい調査がまたれます。

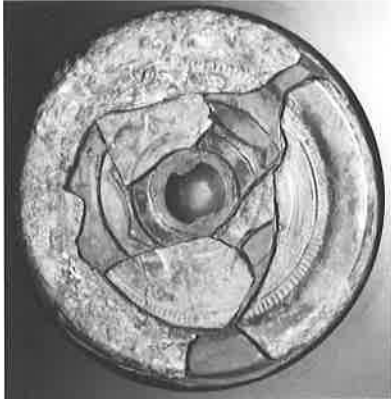
伝舟塚山古墳出土盾形埴輪 これらの破片は舟塚山古墳墳頂出土と伝えられる盾形埴輪の破片です。三角形の線刻文がみられ、矢羽状文による縁取りも描かれています。三角形は集合する線刻で描かれ、さらに三角形の中心を2分する沈線もみられます。盾に三角文のモチーフは多く見られます。



朝顔形埴輪と黒斑のある円筒埴輪

II 古墳時代の発展と終焉

古墳では埋葬された副葬品が発見されます。有機質のものはほとんど残りませんが、金属工芸品や石製のものがみられます。被葬者が生前使用したと思われるものや特別に埋葬されたものがあります。副葬品の種類や工芸技術の発達から時代の推移や被葬者の地位を想像することができます。ここでは利根川下流域を代表する古い時期の古墳の遺物として龍ヶ崎市長峰古墳群第39号墳の出土品を紹介します。鏡、鉄剣そして写真にはありませんが玉とまさしく神話にでてくるような3種の宝器が副葬されました。また取手市糠塚古墳群第2号墳から出土した鉄剣は身幅も厚くしっかりとしており何より1mを越える長大で勇壮な武器です。ひたちなか市磯崎東古墳群から出土した太刀は鞘や柄など有機質部分の残りがきわめてよく、実際の外観がどのようなものであったか参考となります。これらが実用の武器であったことがわかります。「黒作太刀」などの後の時代の墓に副葬された太刀と比較すると装身具の一種としての刀との違いがよくわかります。



長峰古墳群第39号墳出土内行花文鏡

内行花文鏡 長峰古墳群第39号墳から出土した鏡は小形の内行花文鏡で内区文様を復元すると8花になり面径11.5cm、紐の部分は失われています。

* 長峰古墳群第39号墳 龍ヶ崎市長峰にあり長峰古墳群の東端につくられました。東西14.1m、南北13.7mの方形で、高さは2.9mあります。中世城郭の物見台に利用され、原型をとどめず周溝も検出されませんでした。

* 磯崎東古墳群 ひたちなか市の太平洋に面した海岸部の台地縁に立地した古墳群で、かつて52基の古墳が存在したといわれます。なかでも33号墳は2段築成で造り出しが付く帆立貝型古墳で墳丘全体に葺き石が敷き詰められていました。

* 糠塚古墳群 取手市上高井の小貝川支流の台地上にあり、全長30mの前方後円墳1基と直径約20mほどの円墳2基の合計3基からなります。円墳2基には盛土された墳丘の痕跡がなく、円形に墓域を区画した溝だけが検出されました。3基のいずれの古墳からも埴輪が出土しています。2号墳からは木棺直葬の主体部が発掘され、太刀が出土しました。



長峰古墳群第39号墳出土鉄剣・短剣



長峰古墳群第39号墳遺物出土状況（茨城県教育財団）



糸巻きの柄（拡大）



磯崎東古墳出土太刀（全体）



糸巻きの木製鞘（拡大）



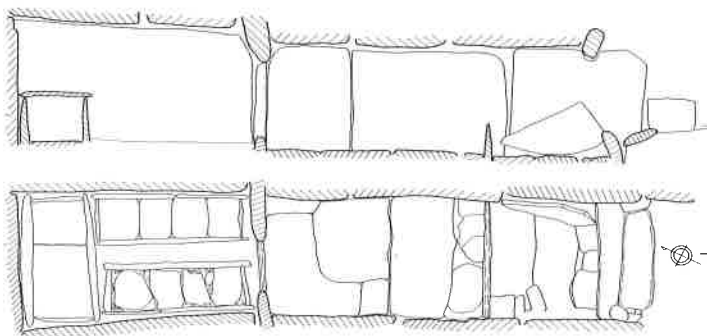
磯崎東古墳出土太刀（全体）



糠塚2号墳出土直刀



風返稲荷山古墳墳丘図



風返稲荷山古墳後円部横穴式石室

* 風返稲荷山古墳 霞ヶ浦町安食にあります。当古墳は、前方後円墳1基・帆立貝式前方後円墳1基・円墳25基・方墳1基・不明6基からなる風返古墳群のひとつです。霞ヶ浦を臨む台地上に位置する全長約70mの前方後円墳で、後円部に横穴式石室、くびれ部に箱式石棺の2つの主体部が発見されました。それぞれの主体部に裏表紙写真にあるような豪華な馬具・直刀・刀子・銅鏡・須恵器・玉類など多くの宝物が副葬されていました。現在、保存処理中ですが今回は特別にそれらのなかから保存処理が完了した分で裏表紙写真にある横穴式石室から出土した銅鏡（蓋、鏡身、承盤）、馬具（鉄地金銅張宝珠付八脚雲珠 1点、鉄地金銅張宝珠付四脚辻金具 4点、鉄地金銅張棘葉形杏葉 2点）、金銅製弓弭金具2点、金環4点、ガラス玉1括、須恵器（台付長頸壺、無蓋高坏、平瓶、台付はそう 4個体）をお借りして展示することができました。

石室前室に副葬されていた須恵器や承台付銅鏡などから7世紀中葉頃の首長墓と考えられます。

風返稲荷山古墳は常陸における最後の前方後円墳といわれています。その特徴ある形態は終末期に築造された前方後円墳についてさまざまなことを教えてくれます。まず前方部の幅が後円部の直径を越える大きさであること、墳丘の傾斜が著しく前方部と後円部の高さがほぼ等しいことは典型的です。全体の形が大きく歪んでいることも興味深い点です。後円部と前方部の設計がうまく噛み合わなかったのでしょうか？

後円部に横穴式石室、くびれ部に箱式石棺と2つの主体部が発見されています。横穴式石室は3つの部屋からなり一番奥の部屋には奥壁に並行して1つ、左右の側壁に並行して2つ合計3つの石棺を作りつけています。このように横穴式石室は朝鮮半島の墳墓の影響を受けて当初から家族墓的な使い方を前提にしていました。しかし、それと関わりなくくびれ部にわざわざ別な石棺を作ったのです。この場合、横穴式石室がこの古墳の本来の主体部で追加で一族外の関係の深い人物が石棺に埋葬されたのでしょう。

III 埴輪文化

古墳時代は別名「前方後円墳の時代」ともいわれます。それは4世紀から7世紀までの400年間を前方後円墳という墓をつくる伝統を守った文化だからです。400年間といえますから現在を基準で考えると江戸時代以前までさかのぼってしまうことになります。そして、もう一面ではその起源となる弥生時代に大型の器台と壺による祭祀から発生した埴輪文化もまた継続されてきたのです。古墳には古墳作りの、埴輪には埴輪作りに携わった人々がいました。古墳時代も6世紀代にはいると小型の前方後円墳が多くつくられるようになるなど一般化して、古墳にたてられる埴輪もまた拠点的な埴輪生産地からおのおのの墓に運ばれるようになります。

* 金塚古墳 手賀沼に面した台地の縁辺の山林中にある径約20mの円墳です。群集墳の形をとるこの地域の円墳の一般的なあり方と異なり、周辺にそれ以外の古墳の分布が見られません。造営年代は5世紀末と思われます。完備した埴輪列・石枕・短甲など優れた副葬品をもち我孫子古墳群において埴輪の使用が開始された時代を象徴する古墳と考えられています。本格的な埴輪供給のさきがけ的な存在とみられています。編年すると金塚古墳→子の神古墳群→高野山古墳群とおもわれます。

* 子の神古墳群 我孫子市寿2丁目にあり、手賀沼北端の台地上に位置する古墳群です。長さ20mの前方後円墳を最大として13基の円墳からなります。前方後円墳からは高野山古墳群と類似した円筒埴輪が出土しています。

* 高野山1号墳 我孫子市の手賀沼に沿った台地の上にある古墳群のひとつです。高野山1号墳は高野山古墳群中一番規模の大きな前方後円墳です。後円部と前方部の墳丘の高さが同じで、いわゆる二子山形式です。墳丘には埴輪円筒列が一重めぐらされ、4個あった埋葬施設はいずれも墳麓にあり、皆形式を異にしています。この埴輪の特徴は胴部隆帯（タガ）が断面三角形となり朝顔形埴輪も普通の円筒埴輪に花卉状の1段を追加しただけという退化した形態を示している点です。この周辺の埴輪の最終形態と考えられます。



糠塚古墳群出土円筒埴輪



金塚円筒埴輪



糠塚古墳群出土形象埴輪



高野山古墳群形象埴輪



高野山1号墳円筒埴輪

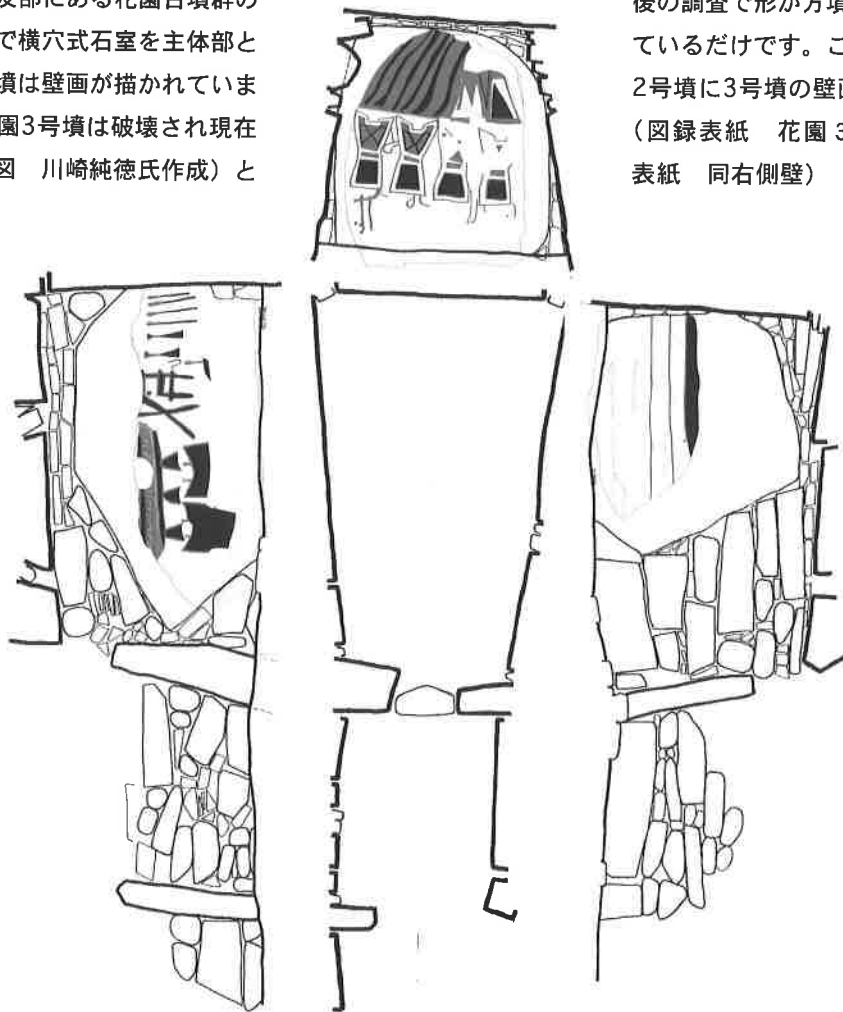


子の神7号墳

IV 古墳時代の終末

古墳時代は6世紀後半にひとつのピークを迎えたかのような発展をします。この時期には全長30mに満たない前方後円墳が作られるなど熱心に古墳作りがおこなわれ多くの古墳に埴輪が建てられました。そして7世紀中葉の645年に発令された「大化の薄葬令」をきっかけとして終末を迎えたと考えられています。実際に7世紀ころから埴輪は作られなくなり、まもなく前方後円墳も築かれなくなります。その一方で横穴墓や方墳など新しい形態の墓がつけられ常陸では古墳の横穴式石室に彩色壁画や線刻壁画の描かれたものがあらわれました。

花園古墳群 岩瀬町友部にある花園古墳群のうち2号から4号まで横穴式石室を主体部とする方墳のうち3号墳は壁画が描かれていました。壁画のある花園3号墳は破壊され現在では壁画の内容（原図 川崎純徳氏作成）と



後の調査で形が方墳であったことが伝えられているだけです。ここでは同時期とみられる2号墳に3号墳の壁画をあてはめてみました。（図録表紙 花園3号墳奥壁壁画、図録裏表紙 同右側壁）

花園古墳群第3号墳の壁画は赤、黒、白の三色で描かれています。左側面には通常使用されていた刀、槍、ゆきが描かれ、さらに上には舟と思われる構造物がみられます。奥壁には盾と垂れ幕状の縞模様がみられます。この壁画には器財などが描かれ、人物・動物が登場しないので壁画に器財系と人物系の2つの系統があることがわかります。この壁画とひたちなか市虎塚古墳の壁画の絵には共通点が多くあり、虎塚古墳の壁画は他の器財系壁画の簡略化されたものであることがわかります。

花園2号墳の主体部は花崗岩で構築された全長6.6mの横穴式石室で羨室上の天井石が失われています。玄室、羨室、入口の3つの部分からなっています。玄室奥壁幅は約2.4m、玄室の長さ3.5m、羽子板形をしています。玄室は大きな3枚の壁石と隙間を埋める小割の石材でつくられています。天井石は玄室の部分で3つの石で構成しています。玄室の高さが約2.0mあるのに対し、羨門の高さは1.4mほどで玄室と羨室では天井の高さで区別をつけていました。

十五郎穴横穴墓 ひたちなか市中根にあります。那珂川の支流である本郷川左岸の崖面に幅1.5kmにわたって穿かれており、茨城県史跡に指定されています。32号墳からは蔵骨器・高杯・杯など43器の須恵器が多量に出土し、玄室からは鉄鏃・鉄釘・鉄塊などとともに一振の黒作大刀が出土しました。黒作大刀は推定全長80cm、銅製の刀装具を良好に残しており、正倉院に納められている大刀に極めて類似している重要な資料です。（裏表紙写真）



石室内東棺・くびれ部
石棺出土飾太刀



石室内前室
出土馬具



くびれ部石棺外出土馬具



銅鏡



石室内前室出土須恵器

風返稻荷山古墳出土遺物



十五郎穴横穴第32号墳出土黒作太刀



花園古墳群第3号墳石室壁画

取手市埋蔵文化財センター第14回企画展
常総古墳文化の系譜—日本国家の源流
平成16年10月26日～12月24日
編集／発行 取手市埋蔵文化財センター